日中国交正常化30周年記念

HNS研究所 第4回訪中文化経済交流団

山東省を訪ねて

日中交流の促進を世界恒久平和の実現に

古代から中国大陸と密接な関係のある島根県「出雲」の電気機器メーカー・小松電機産業（小松昭夫社長）が運営するHNS人間自然科学研究所（小松昭夫所長）が、日中国交正常化30周年を記念して主催した「第4回訪中文化経済交流団」が9月4～8日、山東省を訪問した。「日中交流の促進を世界恒久平和の実現に繋げたい」と話す小松昭夫・同研究所長と交流団の取り組みをレポートする。

棗荘市庁舎を表敬訪問（上） 日本文化にも大きな影響を与えた孔子の故郷・曲阜の孔子廟で（左）

棗荘市長からの熱烈歓迎

一行は、山東省棗荘市長の馬金忠氏自らの歓迎を受けた。馬市長は、「交流団団長であり、主催者のHNS研究所所長の小松昭夫先生は棗荘市人民政府の経済顧問で、日本棗荘経済貿易促進センターの代表も務め、数年来、棗荘市の経済建設に貢献している。今年は小松先生の尽力により、柘榴祭りと投資商談会には日本の友人100名近くの参加があった。小松電機産業からも棗荘市に3台のシートシャッター『門番』をご寄贈いただいた。棗荘市の300数万人の市民を代表し、日本の友人に感謝する」と、小松所長の日頃の貢献に感謝の意を表した。

さらに今回、HNS研究所と山東省滕州市人民政府は、共同で自然健康法研究センター建設のための調印を行った。中国の著名な医師であり、HNS研究所研究員でもある馬光武医師が主任を務める同センターは、中国人に自然健康法を利用した医療を推進すると同時に、より多くの日本人が健康を回復し、各種の病気を治療することになる、と期待を集めている。

こうした経緯から小松所長は「日中国交正常化30周年という記念すべき今年、出雲と関連の深い棗荘市から銅像を日本にお運びし、両国のさらなる理解を促進したい」としていた。

9月7日に棗荘市招商局広場で行われた式典には、中国山東政協副主席、周藤彌兵衛、清原太兵衛像の除幕を行った。

日中偉人の銅像を日本に

中国を代表する思想家である孔子と孟子、その思想を受け出雲の治水に多大な貢献をした、周藤彌兵衛、清原太兵衛――21世紀は水の時代、より多くの人にこれらの偉人のことを知ってもらいたい、という目的で、HNS研究所では、前々回の交流団訪中の際に、中国画報協会を通じ、棗荘市に銅像製作を依頼していた。今回、銅像完成を記念して除幕送出式典が開催された。

同市南部にある台児荘は、毛沢東率いる共産党と蒋介石率いる国民党政府が協力して、日本軍を敗退させた歴史的な「台児荘大戦」があった地域。さらに、出雲の63連隊がこの地で多くの災難を与えるとともに、同連隊の兵士約1千人も亡くなった。

銅像除幕送出式で挨拶する小松所長（上） 孔子、孟子、周藤彌兵衛、清原太兵衛という日中4偉人の銅像は、今月中には日本に到着する予定だ（下）

今回制作された4体の銅像は、出雲に日本全国の神が集まるため「神在月」といわれている10月末に日本に到着する予定。島根県松江湖南テクノパークの「団地祭り」でお披露目が行われた後、孔子・孟子像は、日本一の中国式庭園である島根県立美術館での展示を希望しているが、行政からは色好いお返事をいただけていない。設置場所についてはいろんな方のご意見を聞きながら検討中」である。

台児荘大戦記念館に寄付

来年は、歴史的な「台児荘大戦」から65周年を迎える。交流団は、「台児荘大戦記念館」を参観、小松所長が献花するとともに、来年に行われる台児荘大戦65周年記念行事基金として100万円を寄付した。

同交流団の記念館訪問には新華社の記者も同行、小松所長をはじめとする交流団の日中友好の取り組みを全世界に向け配信された。小松所長はこれまでも「災い転じて福となす」という考えのもと、韓国の独立記念館、西大門刑務所歴史館など世界の戦争記念館を積極的に訪問、寄付活動を行ってきた。第2回交流団では、蘆溝橋の中国人民抗日記念館を訪問し、「抗日戦争史研究暨和平教育基金会」に100万円の寄付を行っている。

こうした活動は中国政府からも高い評価を得ている。中国外交部新聞司の郭宝忠氏は、今回の訪中国について「中日国交正常化30周年記念の年に、これだけの規模の交流団が中国を訪問し、文化経済交流を行うと同時に、棗荘台児荘大戦記念館を訪れ、献花と寄付を行ったことは中国人民にとって喜ばしいことである。我々は、中日の永続的な平和を望むとともに、日本の友人が中国の抗日戦争記念館を訪れることを希望する」と評価している。

棗荘市長では、党書記、市長などと会見した（上）
一行の滞在中には、棗荘市の輸出商品を展示する投資貿易商談会も行われた（下）

王久祐・中国山東政協副主席に「論語」が贈呈された（上） 刑雁・中国画報協会会長と銅像製作者が贈呈された感謝状と記念品（下）

山東省内ホテルに「論語」寄贈

08年に開催される平和の祭典、北京オリンピックに合わせ、中国国内を旅行する内外の観光客に世界平和実現の議論の輪が広がることを目的として、HNS研究所では、今年2月に同研究所から出版された日中英対訳「論語」を中国・アジアの有名ホテルの客室に配置することを目指している。その第一歩として、今回の訪中では中国孔子基金会と山東省人民政府に「論語」を寄贈した。

山東省は孔子の故郷・曲阜があり、全国のなかでも特に孔子思想との関わりが深い土地。山東省政府は小松所長に感謝状を贈り、儒学への貢献を評価した。小松所長は「88年にノーベル賞受賞者がパリに集まり、世界平和のために孔子の知恵を取り入れようということが話し合われた。同年には、私が若手経営者のための〝知革塾〟を立ち上げたこともあり、彼らの考えを受け、世界恒久平和を生み出す新たな文化の創造を目指して活動している」と話している。

世界平和のための今後の目標

「日本海を中海に改名しよう」「日本に1千人以上いる〝地域の偉人〟の志を世に広めよう」など、様々な活動を行うHNS研究所。小松電機産業社長であり同研究所長として、数々の平和活動に取り組む小松所長は「化学用語の〝昇華〟固体を気体に〝災い転じて福となす〟これが活動のコンセプト」と話す。

日本はアジアを中心に多くの国々との「歴史的問題」が未解決なままだ。

「世界には多くの戦争平和記念館がある。中国国内だけでも、100カ所といわれる。私は研究者ではないので、仔細な事実関係はわからないが、少なくとも、こういった施設が各地に作られ、展示を見た人、これから見るであろう人が多数いるのは事実。そうした状況のなかで、被害者加害者双方を理解するとともに現実を直視し、自分のこととして問題を受け止め、未来に繋げたい」ことで国家を統一し、間接民主主義発祥の地ともいわれる日本・出雲の歴史的役割を果たすときがきた。アインシュタインの1922年の来日講演は、今日を暗示しているように思える」と小松所長は語った。

「とにかく実際に行動することが大切」という小松所長の最終目標は「世界の戦争平和記念館のデータベース化」と定期的な「世界平和会議開催」だ。

「世界中の戦争平和記念館を全部見るのは難しい。各記念館の資料を電子映像化し、人類共通の財産として集め、恒久平和に向けての新たな知の生まれる議論の場をつくりたい。直接民主主義発祥の地はギリシャ、譲るわけにはいかない」と小松所長は語った。

一行は台児荘大戦記念館(右) を訪れた。 小松所長は来年の台児荘大戦65周年記念行事基金100万円を寄付した（左）